箒のセカンド幼馴染は…

TARO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
　箒のセカンド幼馴染は…

【Ｎコード】
Ｎ３５４０Ｚ

【作者名】
ＴＡＲＯ

【あらすじ】
　篠ノ之箒は転校先の小学校で１人の男の子と出会う。
転校し家族と離れ離れになり１人ぼっちになってしまった箒と友達になってくれた男の子。そんな彼とは小学校６年までずっと一緒だった。しかし彼はある日突如その姿を消してしまう。警察が捜索を行ったが遂に彼が見つかることは無かった…。
そして３年後。箒は入学したＩＳ学園で彼と再開することとなる。
しかしそこで出会った彼はもう、以前の彼ではなかった…。
※ＩＳオリ主ものです。モデルは黒の王子様です。　　ちょっと設

定に無理があったりするかも知れませんがそれでもおｋ。と言う方、
暖かく見守って下さい。
因みに作者は現在原作勉強中です。

プロローグ

「さて、じゃあ今回の任務を言い渡すわ」

暗い室内にて二つの人影が向かい合っている。
一つはたった今声を発した少女のもの。
流れる清水のような蒼い髪。意志の強そうな紅い瞳。１０人の男とすれ違えばその１０人が振り返るような美貌と抜群のプロポーション。その口元には薄く笑みを湛えている。

その少女に対するは全身黒尽くめの男。
その身体は首から足首まで漆黒のマントで包まれており更に唯一肌を除かせているその顔もその半分を隠すようにバイザーのような黒いサングラスに覆われている。唯一見えているその口元は硬く真一文字に結ばれていた。

パンッ。と小気味いい音をたてて少女が白い扇子を開き口元を隠す。
その扇子には『ＩＳ学園』とやけに達筆な文字で書かれていた。

「今回の任務はＩＳ学園に潜入し織斑　一夏の護衛を行うことよ」

彼女の口から出た『織斑一夏』とはつい最近全世界に発表された世界で唯一ＩＳを動かすことが出来る男性のことだ。
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉とは天才科学者『篠ノ之　束』

によって開発された宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツのことである。
そのＩＳは現在その本来の開発目的である宇宙開発に使われることなく軍事兵器として全世界に広まっている。

ＩＳは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるＩＳアーマーから形成されており、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器である。
特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。
そしてＩＳには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出すことができる。
さらにハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

そしてさらにさらに、ＩＳにはこれを究極の機動兵器足らしめる機能が搭載されていた。
それが『自己進化』である。
ＩＳは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、ＩＳ自らが自身の形状や性能を大きく変化させる『形態移行』を行い、より進化した状態になる。つまり操縦時間に比例してＩＳ自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりＩＳの性能を引き出せるようになるのだ。

各国は挙ってＩＳの研究、開発に力を入れ始めた。
ところがここで問題が一つ発生した。ＩＳの心臓部であるコアは完全にブラックボックスと化していて開発者である篠ノ之束にしか製造出来無かったのである。
そしてここでもう一つ問題が発生してしまう。それが篠ノ之束の失

踪である。
彼女は突如コアの製造を止めて行方をくらませてしまい、ＩＳの数は今まで彼女が製造したコアの個数、合計で４６７機に固定されてしまったのだ。
当然、各国間でコアの熾烈な奪い合いとなったわけなのだが現在ではそれも落ち着き、各国は少しでも他国と差をつけようとＩＳの研究、開発に躍起になっていた。

さて、ここまで長々と説明したがこのＩＳにはただ一つ決定的な欠陥が存在していた。

ＩＳは女性にしか動かすことが出来ないのだ。

しかし、だからといってこれほどの兵器を使わない手は無い。
そのため現在世界の男女の社会的パワーバランスは一変して女尊男卑が当たり前になってしまったのだ。

そしてそこに現れた、世界で唯一ＩＳを動かすことが出来る男性『織斑一夏』。

こんな存在を世界の研究者達が放っておく筈が無かった。
彼を調べればＩＳを女性しか動かすことが出来ない原因が分かるかもしれない。男性でもＩＳを動かすことが出来るかもしれないのだ。
それらの理由からして各国が彼に接触をとろうとすることは明らかだった。
その中に誘拐などを行おうとする奴等がいないとは限らない。
そのため彼はその身をＩＳ学園に置くことを余儀なくされたのだっ

た。

ＩＳ学園とはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、ＩＳ操縦者育成用の特殊国立高等学校である。
操縦者に限らず専門のメカニックなど、ＩＳに関連する人材はほぼこの学園で育成される。
また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約がある。
勿論、そんな学園の警セキュリティが軽微な筈が無い。つまりそこに彼の身を置き保護しようというわけである。
しかし、

「『ＩＳ学園はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない』…なんて規定は半ば無実化している。全く干渉されないなんてことはありえない。そこで…」

彼女はそこまで言うと口元を隠していた扇子をたたみ、男へと歩み寄る。

「貴方の出番ってわけ」

扇子で男の胸を突きそう告げた。
すると今まで一言も発せず彼女の言葉を聞いていた男がその硬く閉ざされていた口を開いた。

「俺はＩＳを動かすことは出来ない」

「知ってるわ。でも貴方には『アレ』があるじゃない」

「『アレ』はＩＳなどではない」

「大丈夫よ。少し形は異常だけど、今の世の中『アレ』を見てＩＳと思わない人は居ないわ」

男の口調は単調でまるで機械を思わせるようだったが、少女は特に気にした風も無くそれに応える。

「それにシールドエネルギーの表示とか、ＩＳと同じように見えるようにこっちで偽造しておくわ。…ここまでするのだから引き受けてくれるわよね。それにこの任務…」

そういって彼女は妖艶に微笑むと今まで男の胸を突いていた扇子を身体を上を滑らせるように男の顔の前まで持っていくと

「貴方の大嫌いなＩＳを合法的に潰すことが出来るのよ？」

男の心の最も暗く黒い部分を突く言葉を投げかけた。

それを聞いた男は何も言わず、ただ踵を返しこの部屋唯一のドアへと歩いていく。
そしてドアの前に立ちそのドアノブへ手を掛けたとき不意に口を開いた。

「何時からだ」

「3日後よ。その日に学園の入学式があるから彼と一緒のクラスになってもらうわ」

突然の男の問いかけに対し、少女は動揺することなくそれに応じる。
まるで男がそう尋ねることが分かっていたかのように。

それを聞いた男は少女の方を見ることも何も言うことも無く部屋を出て行った。
一人部屋に残された少女は男が出て行ったドアを見つめて、

「少し炊きつけ過ぎちゃったかしら？」

そう呟いた。
彼女は見てしまった。
表面上は冷静に保っていた彼の顔が薄く光っていたのを。

それが何を意味するのか。それを知る人間は彼女を含めて僅かな人数しか居ない。
しかしその理由を知っている彼女は彼を炊きつけるためとはいえ、

あんな言葉を彼に投げかけてしまったことを後悔するのだった。

プロローグ（後書き）

実は作者もう一つ小説を書いております。
それと平行して書きますので更新は遅くなると思いますが、どうぞよろしくお願いします。

第1話

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ始めますよー」

１年１組の教室内に先程自己紹介をしてもらったこのクラスの副担任である山田（やまだ）　真耶（まや）先生のぽわっとした、なんとも締まらない声が響く。

そんな彼女の容姿であるが、その声の通りと言っていいのか童顔で（眼鏡を掛けているのだがサイズが大きいのかずれていてそれが彼女の顔をまた幼く見せている）背が低く、おまけに身に着けている衣服のサイズが合ってないのかだぼついていてそれがさらに彼女を幼く見せていた。

「それじゃあ皆さん、１年間よろしくお願いします」

そんな彼女が生徒に向かって挨拶をしているのだが、残念ながら生徒達の視線が彼女に向けられることは無かった。

なぜなら彼女達の視線は皆一様にある一点へと向けられているからだ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと出席番号順で…」

誰からも反応されない副担任は涙目になりながらも何とかこのＳＨＲを進行させていく。

流石にその言葉を無視する生徒達ではなかったようで出席番号1番の生徒から自己紹介が始まっていった。

そんな中、彼女　篠ノ之（しのの）　箒（ほうき）も他の生徒たちと同様にある一点を見つめていた。

その視線の先にあるのは…いや、居るのは織斑（おりむら）　一夏（いちか）。世界で最初にISを動かした男であり、箒の幼馴染である。

彼と箒は小学校のときに1年生から彼女が引っ越す小学校4年生までずっと同じクラスだったのだ。

そして彼は箒の初恋の相手でもあったのだ。

切欠は小学2年生の時、同級生の男の子からいじめられていたところを彼が助けてくれたことだった。

それ以前は彼と何かと馬が合わずに衝突ばかりしていたのだがそれ以降は名前で呼び合うようになり、さらに同じ剣道の道場に通うことで打ち解けていったのだ。

それ以来、彼のことが気になっていた箒だが小学4年生のときに引っ越してしまってそれ以降は会うことも無かった。

つまりおよそ6年ぶりの再会となるのだ。

初恋の相手と6年ぶりの再会。そんな状況にときめかない女の子はいないだろう。

もちろん箒もそんな女の子の一人であり、久しぶりに見た彼の横顔に胸をときめかせていた。

不意に、彼が彼女の方を振り向いた。

どこか縋るようなその視線に彼女は思わず顔を背けてしまう。

何とか表情は先程からの仏頂面を崩さなかったがその顔はほんのりと紅く染まっていた。

思わず顔を背けてしまったが変に思われなかっただろうか？

顔が紅くなったのがばれていないだろうか？

「えー……えっと、織斑　一夏です。よろしくお願いします」

そんなことを彼女が考えている間に彼の自己紹介が始まってしまったようだ。
生徒達の視線が彼に集中する。その視線には皆一様にこれから何を話してくれるのかという期待が込められている。

「……」

しかし彼は何も語らない。いや、語れない。
今まで普通の、何処にでもいるような学生だった彼はこんなに大量の、それも全て異性からの視線に晒されたことなどなかった。
そしてそんな状況になってしまった今、彼は思考が完全に停止してしまったのだ。

しかし、何か言わなければ。
このまま黙っていたら『暗いやつ』なんて不名誉なレッテルを張られ1年間を過ごさなければならなくなる。
そんな考えが彼の脳裏に過ぎり兎に角何か喋らなければと必死に頭を働かせる。
そしておよそ15秒。
ひとつ大きく息を吸った彼が口にした言葉は、

「以上です」

都合１２名の女子をずっこけさせる魔法の言葉だった。

「あ、あのー……」

彼のあんまりな自己紹介に涙声になりながらも抗議をしようとする山田先生。
背後からかけられたその声に思わず振り返ろうとした一夏だったが…。

パァンッ！という乾いた音とともに頭への強烈な衝撃によってその行動は止められた。

「いっ――――――！？」

痛い。と言おうとしたのだろうその言葉は正しく発せられることは無かった。
その一撃はそれほどまでの威力だったということだろう。
そしてそんな一撃を出席簿で繰り出した人物は何時の間にか一夏の背後に立っていた女性だった。
スラリとしたその身体は程よく鍛えられていて、しかし女性的なボディラインは一切失われていない。その長身を包むのは黒いスーツと同色のタイとスカート。きりっとした鋭い双眸はまるで狼を連想させる。

一夏はその人物に心当たりがあるのか恐る恐ると振り返り、

「ち、千冬姉（ねえ）――――ッ！？」

パァンッ！と本日二発目の出席簿による一撃を喰らった。

「織斑先生と呼べ」

「……はい。織斑先生…」

さてこのやり取りで気付いた者も居るだろうが彼女『織斑　千冬（ちふゆ）』は一夏の実の姉である。
そんな人物がなぜこのＩＳ学園に居るのかというと、

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を１年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことは良く聴き、よく理解しろ。できないものはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが私の言うことは聞け。いいな」

そう。彼女はこのＩＳ学園の教師なのだ。
さらに言うとこのクラス、１年１組の担任でもあるのだ。

そしてそんな彼女からの暴力的とも取られかねない発言に対して起きたのは困惑のざわめきではなく、黄色い声援だった。

「きゃーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

喧々諤々。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

そんな様子に千冬は鬱陶しそうな表情を隠そうともせず呟いた。が、

「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そして付け上がらないように躾をして～！」

しかし彼女のその辛辣な物言いは彼女達を再び炊きつけるだけであった。

「…で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

そんな少女達を放置することに決めたらしい彼女は先程のあんまりな自己紹介について一夏に言及する。

「いや、千冬姉、俺は――――――ッ」

パァンッ！と本日三発目になる出席簿が一夏の頭に炸裂する。
どうやら彼は余り学習というものをしないらしい。

「織斑先生、だ。馬鹿者」

「……はい。織斑先生」

頭を押さえながら返事をする一夏を一瞥し、千冬は教壇へと戻っていく。
そこで彼女は未だ騒がしい教室内を静かにさせるめ、手に持った出席簿で教壇を叩いた。
それほど大きい音が出たわけではないが今静かにしなければその出席簿が今度は自分の頭に振り下ろされるであろう事を察した生徒達は一発で静かになった。

「さて、自己紹介の途中だがここでもう一人、諸君等のクラスメイトを紹介する」

その千冬の一言によって再び教室内が騒がしくなる。
しかし彼女が再び、今度は少し強めに教壇を叩くと皆一様に口を閉じた。

「静かにせんか馬鹿者。で、予め言っておくがそのクラスメイトとは先日発表されたもう一人の男のＩＳ操縦者だ。同じ男の織斑が居るということで急遽このクラスへと入る事が決まった」

千冬の話に何人かの生徒が声を上げそうになるが、千冬の出席簿を持つ手がピクリと動いたのを見て慌てて口を閉ざすのだった。
そんな生徒達を横目で見ながら彼女は教室のドアへと声を掛けた。

「入って来い。天河」

その時、箒はこのＳＨＲが終ったら一夏と何を話そうかを考えていた。
しかしそんな彼女だが織斑先生の話はしっかりと聞いていた。
一夏に次いで発表されたＩＳを起動した男。
しかしその情報は極端に少なく、その名前さえ明かされていなかった。
そんな謎の多い２人目の男のＩＳ操縦者だが、正直箒には興味はなかった。
織斑先生が、彼の名前を呼ぶまでは。

「入って来い。天河」

ドクンッ！！と心臓が大きく跳ねた。

『箒ちゃん』

頭の中に彼の声が響く。

３年前に突然姿を消してしまった、彼の声が。
天河という苗字は珍しいが彼のほかに居ないなんてことはない。
だから今天河と呼ばれたのは別人だ、彼ではない。
だって彼は３年前に消えてしまったから。警察が捜索しても遂に見つからなかった彼が此処にいるはずがない。

ガラリ、と。教室のドアが開かれた。
そこから現れたのはスラリとした背の高い男だった。
短く切られた赤茶色の髪。１７５ｃｍはあるだろうその身体は一夏が来て居るものと同じ、男性用のＩＳ学園の制服に包まれている。
しかし一番目を引くのは彼の顔の半分を覆っている黒いバイザーのようなものだろう。
そのバイザーの所為で彼の表情を伺うことは出来ないが、見えている口元は硬く真一文字に閉ざされていて、何者もを寄せ付けない雰囲気を醸し出していた。

『よろしくね。箒ちゃん』

…違う。
彼はあんな人を寄せ付けないような雰囲気をしていなかった。

「天河。自己紹介をしろ」
「天河（てんかわ）　明人（あきと）だ」

『俺、天河　明人って言うんだ』

違う…。

彼はあんな冷たい声をしていなかった。

「全く。お前もまともに自己紹介が出来ないのか…。仕様が無い、だれか天河に質問がある者はいるか？」

「はい！そのバイザーみたいなのはなんで掛けてるんですか？」

「生まれつき視力が弱くてそれを補うために掛けている」

『大丈夫！箒ちゃんが迷子になっても俺が直ぐ見つけてあげるよ』

違う。

彼はとっても目が良くて、よく迷子になってた私を直ぐに見つけてくれた。

「はーい！趣味はなんですか？」

「特に無い」

『箒ちゃん。今日は肉じゃがを作ってみたんだ。食べてみてよ』

違う…！

彼は料理が好きで、良く私に作ったものを食べさせてくれた…！

「はい。好きな食べ物は？」

「辛いものだ」

『んー…、嫌いってわけじゃないんだけど。舌がおかしくなりそうで…』

違う！
彼は舌が馬鹿になるからといって辛いものなどは余り食べなかった！

「はいはい！そのバイザー取ってみて下さい！」

「ふむ、そうだな…。天河、これから1年間同じクラスで過ごすんだ。皆に素顔くらい見せておけ」

「……」

千冬先生の言葉に彼は無言でそのバイザーを取る。
現れたのは触れれば切れる刃物のような細く鋭い双眸。

違う！！
彼はあんな突き刺さるような鋭い目をしていなかった！！

――――――――――でも。

その目を見た瞬間に、分かってしまった。
こんなに変わってしまっても、彼が3年前に居なくなってしまった『明人』だということが。

「さて、そろそろ時間がないな…。次の質問で最後としよう」

織斑先生が何かを言っていたが聞こえない。
夢遊病者のように席を立ち彼の元まで歩み寄る。
周りの人達が怪訝な顔でこちらを見たり、声を掛けたりしてくるが、止まらない。
そして彼の目の前までたどり着くと、未だ無表情な彼に向けて声を掛けた。

「明人……？本当に…明人なのか？」

私の言葉を聞き、今まで全く変わらなかった彼の表情が、崩れた。

「箒……ちゃん？」

こうして、お互いにもう出会うことは無いと思っていた幼馴染はここに再会したのだった。

第1話（後書き）

感想などありましたらよろしくお願いします。

第2話（前書き）

今回本編が凄く短いですが、最後にアンケートがあるのでよろしければご協力お願いします。

第2話

今はＳＨＲが終わり、１限目の授業が始まるまでの１０分間の休み時間。
学園の屋上には人影が２つ。
２つの人影、少女と少年は向かい合っており、しかしお互いに口を開こうとはしない。
そんな状況のまま時間は過ぎ、只でさえ１０分という少ない休み時間も残り僅かになってしまった。

びゅう、と強い風が吹き少女―――篠ノ之箒の後で結った長い髪がはためく。

「明人……」

漸く箒の口が開かれてそこから出たのは、３年前に行方不明になって、そして今自分の目の前に居る幼馴染の名前だった。
箒は今にも泣きそうな表情で目の前の人物―――天河明人を見つめる。
対する明人の表情は黒いバイザーに覆われていて窺うことはできない。

「久し振り、だな…」

「ああ」

搾り出すような箒の声と、それに応える明人の淡白な声。

「げ、元気にしていたか？」

「ああ」

3年振りに会った幼馴染に何を話したらいいのか分からず、自然と会話の内容は当たり障りのないものになってしまう。
そして明人の声は相変わらず抑揚がない、何を考えているか分からないものだった。

「……この3年間…一体何をしていたんだ」

「……」

箒のその問いに明人は応えない。

「心配していたんだぞ…」

「……」

俯き、声を震わせながら言う箒に明人は応えることができない。

「3年前とはまるで別人じゃないか…！」

「……」

箒は感情を抑えることができずに徐々にその声音が強くする。

「この3年に一体何があったんだ！明人！」

何時までも応えようとしない明人に遂に箒は声を荒げて明人に詰め寄る。その瞳に涙を溜めて。

そんな箒に、明人は漸くその固く閉じられた口を開いた。

そしてその口から出た言葉は、

「知らないほうが良い」

やはり抑揚の無い声で、彼女を冷たく突き放した。

「――――っ！！」

パンッ！と乾いた音をたてて明人の頬が叩かれる。

明人の頬を叩いた箒はその勢いのまま彼の胸倉を両手で掴む。

「知らないほうが良いだと！お前が居なくなったあの時！私がどれ程心配したと思っているんだ！！」

そう叫ぶ彼女の瞳から大粒の涙が零れる。一度流れてしまった涙はもうとめることができない。

「警察が探しても見つからないし！私は…もう、明人が……し、死んじゃったのかと……ぅっ！」

そこまで言って彼女は彼の胸倉を掴んだまま俯いてしまう。
その肩を震わせ、足元に滴を降らせ小さな染みを作る。

叩かれて頬を僅かに赤くした明人は自分の制服を掴む彼女の手を両手でそっと引き剥がす。
相当強く握っていたのだろう。彼女の手が剥がされた場所にはくっきりと皺がついていた。

「この3年間に何があったのか、君に話すことはできない」

彼はそう言うと彼女の手を離し、屋上の出口へと向かって歩き出す。
再び彼の口から放たれた拒絶の言葉に箒は両の手で顔を覆い、肩を震わせて嗚咽を漏らす。

そんな彼女の横を通り過ぎるとき明人が唐突に口を開いた。

「ごめん。箒ちゃんには知って欲しくないんだ…」

「……え？」

箒は彼の言葉に思わず顔を上げ、振り返る。
しかし彼はそれ以上何も語ることなく屋上を後にした。

先程の彼の声は今までのような抑揚の無い、無感情な声じゃあなかった。
その震えた声には深い悲しみとほんの少しの恐怖が含まれているように箒は感じた。
一体何が彼をあんな風に変えてしまったのだろうか。

「明人……」

その答えは分からなかったが最後の彼の言葉に彼女は昔の、あの優しかった頃の彼を感じたのだった。

第2話（後書き）

皆様にアンケートです。

この小説のメインヒロインは箒ですが、あと1人サブヒロインを追加したいと思っています。
因みに一夏のファースト幼馴染を主人公が盗ってしまったのでセカンド幼馴染である鈴はヒロイン候補から外させてもらいます。

と、いうことで。候補は、

?:セシリア・オルコット
?:シャルロット・デュノア
?:ラウラ・ボーデヴィッヒ

の3名になります。

そのほかのキャラに関しましてはもしご希望が多ければサブサブヒロインぐらいの扱いで主人公と絡ませたいと思います。

アンケートの期間はセシリア戦が始まるまでとしたいのであと3話後ぐらいまでとなります。
尚、回答は感想にて受けつけます。

皆様奮ってご参加下さい。

第3話

現在時刻９時１６分。
ＩＳ学園では２時限目の授業が開始されていた。
それはここ１年１組でも例外ではなく、山田真耶先生が教科書の内容を生徒達に読み聞かせていた。
生徒たちは山田先生の話を真剣に聞き、重要だと思った箇所はノートに取っている。
そんな中、山田先生の方を見てはいるがその目の焦点は合っておらず、さらに熱くも無いのに汗をだらだらと？いている生徒が１人。

（ぜんっ――――ぜん分からん……！）

世界で初めてＩＳを起動させた男、織斑一夏その人である。

（や…山田先生は何を言ってるんだ？アクティブなんちゃら？広域うんたら？なにそれおいしいの？いや、全然おいしくなさそうだけど……）

まさか分かってないのは自分１人だけではないのだろうか？
そんな不安に駆られた彼はふと隣の席に座るこの学校で唯一自分と同性の生徒をちらと見た。
織斑一夏に次いで、男性でＩＳを起動させたと発表された天河明人

である。
彼はノートを取ることなくただ前を見つめている。
授業の内容を理解しているのかいないのか、相変わらずその表情はバイザーによって隠されているため判断が付かない。
ただ一夏のように狼狽はしていないようでそんな様子から一夏は、きっと分かってるんだろうな～。なんて思っていた。

（そういえば…箒は天河のことを知ってるみたいだったな……）

もう授業の内容のことはどうでもいいのか、一夏はＳＨＲの時の箒と明人の事を思い出していた。

（ＳＨＲの時、箒の天河を見たときの反応は普通じゃなかったよな。例えるなら…死に別れたはずの旦那に会ったみたいな？）

その時の２人の様子を見て、２人が徒ならない関係なのでは無いかと推理する一夏。……なんだか例えが妙に昼ドラっぽいのが気になるところだが…。

（それにＳＨＲが終ったら直ぐに２人で何処かへ行ってたみたいだし…。）

先程の休み時間のこともバッチリ目撃していた一夏。
まぁ目撃するも何もＳＨＲが終るなり箒が明人の手を引いて教室か

ら出て行ったのだから目に付かないわけが無い。
勿論、他のクラスメートもその光景を目撃しており授業が始まるまで多くの女子が2人の関係について妄想を爆発させていた。

「――――ら君？」

（まぁ後で聞いてみれば分かるか）

「織斑君！」

「え？あ、はい！」

一夏が思考に浸っていると、何時の間にか自分の近くまで来ていた山田先生が心配そうに自分を覗き込んでいた。
呼びかけても返事が無い一夏を心配して様子を見に来たようだ。

「大丈夫ですか？どこか具合が悪いんですか？」

「い、いえ…大丈夫です」

「そうですか…。なら授業でわからないところは無いですか？あったら遠慮なく聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

えっへん。と胸を張る山田先生。
なもんだからただでさえ自己主張が激しい胸が大変なことになっている。

その光景を色々な感情が篭った瞳で見つめる生徒が数名。
人は得てして自分には無いものに憧れるものなのである。
何が、とは言わないが。

一方、一夏はそんな山田先生を見て、「もしかしたら見た目と違って実は頼れる先生なのでは？」なんて結構失礼なことを考えていた。
そしてそんな山田先生に一夏は自分の疑問を偽り無くぶつけてみることにした。

「はい！先生！」

「はい！織斑君！」

元気よく挙手する一夏に、元気よく指名する山田先生。

「ほとんど全部分かりません」

「え……。ぜ、全部…ですか……」

次いで出た一夏の言葉に流石の山田先生もその勢いを削がれる。
流石に全部分からないとは思っていなかったようだ。その顔が見る見るうちに引きつっていく。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階で分からないって人はどれくらいいますか？」

沈黙（シーン…）
山田先生の問いに答えるものは誰も居ない。
彼女はきっと親切心でそう聞いたのだろう。しかし結果は現段階でわかっていないのは一夏ただ1人であるということを浮き彫りにしたのだった。
まぁ一夏の最初の発言でそんなことは皆分かりきっていたであろうが…。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

今まで教室の端で控えていた織斑先生が一夏に尋ねながら近付いていく。その手に出席簿を携えて。

因みに織斑先生が言った入学前の参考書とは入学者全員に渡されるＩＳについての基礎的な事柄が書かれた参考書のことだ。基礎的といってもその内容は膨大で、そんな内容を1冊に纏めたそれは電話帳ほどの厚さになっている。
その参考書を読んでいれば現段階で授業の内容が全く分からないなんてある訳がないのだが

「古い電話帳と間違えて捨てました」

本当に電話帳と間違えて捨てる馬鹿がいれば話は別である。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

パァンッ！

本日４発目の出席簿が炸裂。

「後で再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

頭を押さえて蹲る一夏に無常な宣告をする織斑先生。

あの分厚い参考書を一週間で覚えるなどかなり無茶な要求である。

一週間で読むだけでも大変な厚さなのにその上覚えるとなると…。

一週間の睡眠時間が二桁を切るんじゃないだろうか。

「い、いや…一週間であの分厚さはちょっと……」

一夏もそれを分かってか控えめながらも抗議をする。が、

「やれと言っている」

「……はい。やります」

目の前の鬼には勝つことができず、首を縦に振ることしかできなかった。

ＩＳ学園での初めての授業を無事（？）終了した一夏は早速隣の席に座る明人へと声を掛けることにした。

「えっと、天河…だよな？俺、織斑一夏。この学園じゃ男は俺等２人だけみたいだし、これからよろしくな」

爽やかな笑顔で言い、握手を求める一夏。
対して明人は差し出された手を取るでもなくただ見つめる。
このとき彼の頭の中では織斑一夏との接し方によって起きるメリットとデメリットを考えていた。

自分の目的のためには出来るだけ彼の傍にいた方が何かと都合がいい。であれば、ここで彼に冷たく接し彼との間に不和が生じてしまうのは旨くない。ならばここは彼との関係が良好になるように努め

ることが得策である。

「ああ。よろしく頼む」

導き出した答えによって、彼の手をとる。

口調は淡白。表情はバイザーで隠れて見えないが、それでも一夏は明人が手を取ってくれたことが嬉しかった。

「俺のことは一夏って呼んでくれよ。その代わり俺も明人って呼ばせて貰うからさ」

「わかった、一夏」

握手を交わし、お互いの名前を交換する2人。

そんな2人を遠巻きに見ていた少女たちはその光景を見て黄色い声をあげる。

「キャー！あれが男の友情なのねー！」

「美少年二人の友情…。いいわ～！」

「絵になるよねー！」

「……どっちが攻めなのかしら…」

などなど。
何やら最後の方に危ない呟きが聞こえたような気がしないでもないが、どうやら2人には聞こえていなかったようである。

「そうだ。明人って箒と知り合いだったのか？」

「ああ。小学5、6年の頃同じクラスだった」

「あぁ、それでか。何かＳＨＲで明人のこと見た箒がなんか死に別れたはずの旦那に会った。みたいな感じだったからさ」

「……」

一夏の例えにどんな例えだ、と思いながらも強ち間違いではないので明人は思わず黙り込んでしまう。
しかし一夏はそんな明人を気にした風もなく笑っている。
鋭いのか鋭くないのか。
そんな一夏を見て明人は「悪いやつではなさそうだ」と結論付けるとその口元を僅かに、ほんの僅かに綻ばせた。

「あ」

それに目敏く気付いた一夏が明人にそのことを追求しようとしたそのとき、

「ちょっと、よろしくて？」

金髪碧眼の『いかにも』な少女が腰に手を当て高圧的な態度でそう問いかけてきた。
知り合ってまだほんの数分しか経ってない一夏と明人だが、この時お互いの気持ちは完全にシンクロしていた。

あぁ、面倒臭そうなやつが来た……。と

第3話（後書き）

本文が短くて周期が早く投稿するのと、
本文が長くて周期が遅く投稿するのはどちらがいいのでしょうか？

アンケートまだまだ受付中です。
皆様の参加お待ちしています。

第４話

２時限後の休み時間。一夏と明人がその仲を深めたところに水を注すように現れた少女。
くるりとゆるく巻かれた鮮やかな金髪に透き通った碧い瞳。
その腰に手を当てた高圧的な態度はいかにも現代の女といった感じだ。

ＩＳは女性にしか起動できない。
その事実が今の世の中に女尊男卑の風潮をもたらしていた。
確かに実際にＩＳを操縦できる女性は優遇されるべきだろう。
しかし、全ての女性がＩＳを扱えるわけではないのだ。
だというのに世の中の、ちょっと勘違いをした女性たちは、

女性＝ＩＳを使える＝男より偉い＝私も男より偉い！

なんて等式を掲げ世の男達を見下している。
勿論、男女分け隔てなく接する女性もいる。
しかし街中で女性が男性を顎で使う光景なんて珍しくも無く、男性を労働力程度に考えている女性も少なくないのだ。

そして今自分達の目の前にいる少女もそんな考えを持っていると一夏はその態度を見て確信した。

「聴いてます？お返事は？」

明らかにこちらを小馬鹿にしたような言い方に一夏は心の中で「やっぱりな…」と呟いた。

「あ、ああ。聴いてるけど……どういう用件だ？」

しかしこのまま黙っていると何を言われるか分かったものではないので一夏は用件を聴いてさっさと会話を終らせようとしたのだが、

「まあ！何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないのかしら？」

「……」

これである。
芝居がかったその言動はこちらを苛つかせようとしてやっているのか、それともそれが素なのか。
一夏は四分六で前者だろうと当たりをつけた。
と、言うか、

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

のである。
誰だか知らないのに「わたくしに話しかけられてるだけで～」なん

て言われてもピンとくる筈が無い。
実際はＳＨＲで自己紹介も行われており、勿論彼女も自分のことを長々と語っていたのだが、どうやら一夏は聴いてはいなかったようだ。

「なっ…！わたくしのことを知らない、ですって……！」

「あぁ。明人は知ってるか？」

一夏の答えに憤慨する彼女を軽く流し、一夏は先程から隣にいる明人へと聴いてみることにした。

「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生の１人だ」

「あら、そちらの方はご存知のようですわね」

先程の態度から一変。明人の言葉を聞いた彼女――――セシリア・オルコットは機嫌良さ気にその鮮やかな金髪を優雅にかきあげ

「わたくしがイギリス代表候補生にして、この度のＩＳ学園入試主席のセシリア・オルコットですわ」

そんな鼻につく自己紹介をするセシリア。
だが、それを聴いて一夏が思うことはと言うと

「なぁ明人。代表候補生って何なんだ？」

がたたっ！と盛大な音をたて、一夏たちの会話を盗み聞きしていたクラスの女子数名がお笑い芸人のようにずっこけた。

「あ、あ…あなたっ！本気で仰ってますの！？」

「代表候補生とは国家代表ＩＳ操縦者の候補生として選出された者たちのことだ」

凄い剣幕のセシリアと相変わらず淡々と応える明人。
字面から考えれば分かりそうなものだが…と皆が思う中で一夏は「あぁなるほどな」などと頷いている。

「そう！つまり！エリートなのですわ！」

明人の言葉で再度気を取り直した彼女は左手は添え腰に右手は天へと掲げ言う。
その芝居がかった言動に流石の一夏もうんざりしてくる。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実を理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

いい加減うんざりしてきた一夏が適当に相槌を打つと、どうやら彼女はそれが癪に障ってしまったようだ。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね。ＩＳを動かせると聴いていましたから少しは知的さを感じさせるかと思っていたのですけど…期待はずれですわね。男性というのは皆こうなのでしょうか？」

「明人は知ってたじゃないか」

「わたくしは貴方に言っているのですわ」

セシリアの言葉に一夏が先程のことを答えられた明人を挙げるが、それを一蹴される。
どうやら彼女の矛先は一夏にロックオンされてしまったようだ。

「まあでも？わたくしは優秀ですから、貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

などと優しさの欠片も感じさせない態度で言ってくる。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ？何せわたくしは――――――」

「セシリア・オルコット」

と、ここまで自分から話すことをしなかった明人が、セシリアの言葉を遮る。
まさか明人が会話に入ってくるとは思っていなかった彼女は明人に怪訝な顔を向ける。
そして次に彼から出た言葉は、

「あまり喚くな。底が知れるぞ」

瞬間。教室の空気を凍らせた。

一瞬、自分が何を言われたのか理解できなかったセシリアはきょとんとした顔をしていたが、漸く理解したのか徐々にその顔を朱く染めていく。

「あ…、あ…あっ！あなた――――――！」

キーンコーンカーンコーン。

彼女が爆発しそうになった瞬間３時限目開始のチャイムが鳴る。

それと同時に担任の織斑先生が教室に入ってきたため彼女は怒りを爆発させるタイミングを逃してしまった。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

キッと明人の事をひと睨みし踵を返すと、彼女は肩を怒らせ自分の席へと帰っていった。

明人はチャイムが鳴るタイミングを見計らって先の発言をしたのだ。チャイムが鳴ればセシリアは言い返すタイミングを逃し、さらに教師が入ってくればその機会さえ失ってしまう。

それをわかった上で行ったというのだからなかなか質が悪い。

そのとき明人の口の端が吊り上がっているのを横目で一夏は見た。

その笑みを見た彼は「今後、明人を敵に回すのはやめよう」と思ったらしい。

第４話（後書き）

なんだかデイリーランキングで順位がどんどん上がってるのでびっくりしました。
この小説を読んで下さった皆様。評価、お気に入り登録して下さった皆様。感想を下さった皆様。ありがとうございます。

これからも皆様のご期待に添えるように頑張りますので、応援よろしくお願いします。

アンケートの方もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3540z/

箒のセカンド幼馴染は…

2011年12月17日08時02分発行